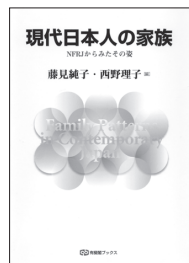


『現代日本人の家族
—NRFI からみたその姿』

● 藤見純子・西野理子 編

(有斐閣, 2009年, A5判, 233頁, 2,310円)



● 平井 晶子

(神戸大学大学院人文学研究科准教授)

本書は、日本家族社会学会が学会をあげて実施している全国家族調査データをもとに、広範囲の読者に「現代日本の家族を多面的に知ってほしい」(i頁)という目的から編まれたもので、専門書というよりは他分野の研究者および一般向けに書かれた著作である。本来なら高度な統計分析を得意とする執筆陣であるが、広範囲の読者に届くよう仮説検証や計量分析型の論述を避け、平明に書かれている。本書のこの試みはおおむね成功しており、多くの読者を獲得できるだろう。そればかりか、平明に叙述しようとする姿勢により、蜻蛉化し全体を見失いがちな専門家に、われわれが注視してきた「多面」とは何かを気づかせてくれる。

本書は、第1章「家族ってなんだろう?」、第2章「時代の中の家族」、第3章「夫との関係・妻との関係」、第4章「親と子のつながり」、第5章「兄弟姉妹とのつながり」、第6章「援助資源としての家族」の6つの章から構成される。各章はいくつもの節に分かれ、そのなかで具体的な家族の側面が紹介され、通読しても、部分ごとに読んでも理解できるものとなっている。

ただし、「はじめに」でも整理されているように、章立てと内容に少しギャップがある。内容的には、家族とは何かを問う第1章と第6章、変動を扱う第2章、現代に焦点を当て、夫婦・親子・きょうだい、それぞれの二者関係を分析する第3章から第5章の3つに分かれる。評者としては、この3つのまとまりに沿って本書を構成し、それぞれに統括部分を加えてほしかった。たとえば、家族とは何かを問うのに、第1章では家族と認知する範囲や居住形態、居住規則から、第6章では危機的事態における機能的側面からアプローチする。両者を関連づければ「家族」がより立体的に見えたのではないか。また、歴史的アプローチで

も、全体としての画期はいつか、連続性はどこかなど、一読してわかる工夫があるとありがたかった。

もう1つ、専門家への気づきという点では、調査されていないテーマが浮き彫りになったことが大きい。それは「相続は大きな意味をもつ財の移転だが、そうした経験は調査されていない」(185頁)との田淵六郎の言葉に端的に表れているように、直系家族制との距離を測る問題群が十分調査されていない点である。これらは焦点を絞った専門的な論文では大きな問題として認識されてこなかったかもしれない。しかし「広範囲の読者」にわかりやすく叙述しようとするれば、たとえば、高齢期の再同居に関して「文脈を推測すれば……伝統的な直系家族制に基づくものではなく……夫婦家族制に立ち……」(24頁)と説明したり、きょうだいの意識の違いを「跡継ぎ意識」(30頁)との見出しで分析したりするなど、肯定するにしろ、否定するにしろ、直系家族制との関連で説明せざるをえない。また、結婚に際しなぜ大多数の夫婦が夫の姓を選ぶのか、大都市の若年層においてもなお、夫方の親との関係が密接なのはなぜかなど、伝統を踏まえて議論せざるをえない問題が再認識できた。今後、これらの課題をどのように同家族調査の項目に組み込むのか、描かれなかった家族の側面をどう扱うのか、(本書の著者たちにかぎらず)広くわれわれに与えられた課題といえよう。

このように本書は、現代家族の特徴を広く知らしめるとともに、われわれ自身の課題を明らかにするという点で、一般読者にも、そして専門家にも大きな意義を有する貴重な存在といえよう。

書評

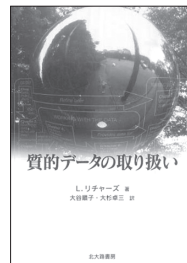
『質的データの取り扱い』

● L. リチャーズ 著

(大谷順子・大杉卓三訳, 北大路書房, 2009年, A5判, 300頁, 3,360円)

● 小川 全夫

(山口県立大学大学院教授)



質的データのコンピュータ処理は、質的手法に関心をもつ人々にとっては、1つの大きな課題である。数量的データについては、すでにSPSSやSASのように標準化されたソフトウェアが確立され流布しているが、質的データの処理については標準化されたソフトウェアはまだ一般的であるとはいえない。質的データを扱う社会調査者のコンピュータ処理能力の向上にむけては、いくつかの方式が試みられているが、本書はイギリスで開発された「QSR NVivo」というソフトウェアの開発者であるL. リチャーズが、分かりやすく質的データ処理をめぐる指南書として書きおろしたものである。すでにコンピュータ用のソフトウェア「QSR NVivo」シリーズが商品化され、その日本語版も市販されるようになってきている。また、これを用いて阪神淡路大震災被災高齢者について分析した成果も発表されている（大谷順子『事例研究の革新的方法——阪神大震災被災高齢者の五年と高齢化社会の未来像』九州大学出版会, 2006。著者は翻訳者の1人でもある）。

うまい表現だなと思う言葉から著者は読者を誘導する。質的手法に関心をもつ研究者は、すでに質的データに出会っていると著者は言うのである。なるほど質的手法では、数量的手法のようにまず方法論があって、その後に数量的データを収集する手法とは異なっている。そこで、質的手法では、研究計画に際して作業手順（ログ）を明確にしておき、目的をもってデータをつくり、そのデータにコーディング処理を施したうえで記録して保管し、そのデータ記録に基づいてカテゴリーを構築し、そのカテゴリーに意味的な解釈を加えて、その結論の妥当性や信頼性を検証する一連の作業手順を踏むことになるということを知りやすく説明している。基本的にはコンピュータのもっているファイル機能を最大限利用して質的データ処理

を行おうとする手引き書である。

質的データを記録する際、正確に、コンテキスト化して、「厚い記述」に努め、役立つように、自分自身もデータの一部として取り込んで省察することが求められる。このような質的データは膨大なデータになる可能性があるが、これを記録するにはソフトウェアを使うことが有益である。テキスト文であれ、画像であれ、コンピュータ・ソフトウェアを用いれば、大量の記録を難なく処理できる。その際に、質的データの発生した場所や人の属性情報や主要部分についての見出しをつけて、フォルダに納めるという作業が重要になる。このためにソフトウェアによる質的データ記録に関連して、「プロジェクト・ノート」「設定ノート」「解釈ノート」という3つのノートを作成するよう指示されている。

コーディングされた質的データのフォルダは、コンピュータ画面では、ツリー状に配置されるが、それは絶えず組み替えることもできれば、再コード化することもできる。コンピュータ・ソフトウェアはそうした作業をいとも簡単にやってくれる。こうしてツリー状体系の末端に位置するノードとしてのフォルダと、複数のノードを結びつけるカテゴリーが、全体像あるいはカタログとして一覧できるようになる。そうなれば、このカタログにしたがって質的データに基づいた理論を構築することができる。

本書は、グラウンデッド理論やディスコース分析などの方法論に基づいて質的データを扱おうとする研究者・調査者にとっては実務的によい手引き書である。今後ますます質的データを扱う社会調査は増えるだろうが、コンピュータ利用を図るうえで1つの道筋を示しているといえる。

書評

『〈失われた時代〉の高校生の意識』

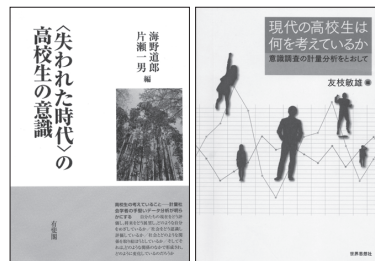
●海野道郎・片瀬一男 編
(有斐閣, 2008年, 四六判, 264頁, 2,310円)

『現代の高校生は何を考えているか』

—意識調査の計量分析をとおして— ●友枝敏雄 編
(世界思想社, 2009年, A5判, 230頁, 2,415円)

●荒牧草平

(群馬大学教育学部准教授)



海野・片瀬(2008, 以下UK08)は, 東北大学教育文化研究会が1986~2003年に実施した仙台圏における4回の調査データに基づく。この継続調査は高校2年生とその両親を対象とした, 他に例を見ない大変に貴重なものだが, 意外にも全体の成果が書籍化されたのは初めてである(他にアスピレーション研究に特化した, 片瀬一男『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会, 2005, がある)。一方の友枝(2009, 以下T09)は, 2001年に福岡県で行われた調査(友枝敏雄・鈴木讓編『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か, それとも変容か』九州大学出版会, 2003)との比較を軸に, 2007年に福岡と大阪で行われた調査に基づいており, 地域比較も可能な設計となっている。

どちらも社会変動による高校生の意識の変容に着目しているが, その射程やスタンスは大きく異なる。UK08は〈失われた時代〉をキーワードに調査の行われた期間に対応した高校生を取り巻く社会変動(特に若年労働市場と教育改革)の影響に注目し, 「計量社会学の専門家として, 節度ある分析・考察(ii頁)」を行いつつ, 来るべき社会の構想に示唆を与える主張がなされる。他方T09は「再帰的近代化」「第2の近代」をキーワードに21世紀の日本社会の変動をとらえ, その特色たる「個人化」「リスク社会化」が高校生の意識にどう反映しているかを問題にする。想定する社会変動の射程が広く理論指向が強い一方, 関心は上記に焦点化されている。

社会に関する意識として, 両書とも規範意識を取り上げる。UK08の2章は規範への「同調性」に偏った従来の議論に対し「序列性」への着目を提唱する。T09の1章は前回との比較から規範への同調の高まりを指摘し, 権威主義との関連からその意味を考察する。またUK08の6章は満

足感と不公平感を取り上げ, 生活満足感の安定性, 社会満足感の低下, 不公平感の高まりを指摘する。T09の5章は社会観や政治的態度に着目して, 保守化の進行, その脱政治性や権威主義との結びつきを論じる。

進路意識は主にジェンダーの視点から描かれる。UK08の3章は女子の高学歴化と男女の競合化, 女子における「非女性職」的専門職志望の増加を指摘。T09の6章は大阪と福岡の地域比較から, ジェンダートラックが後者で強いことを指摘しつつ, アカデミックトラックや自己実現志向との関連を分析する。性別役割分業意識を扱ったUK08の4章とT09の7章はともに近年における保守化を示す。これについて前者は「おいしいとこ取り」志向に言及するとともに, データの特長を生かし親子間での伝達も分析の俎上に載せる。なおT09の4章は別の観点から進路意識に着目し, 旧来的な地位達成志向の強まりを指摘する。

人間関係について, UK08の5章は相談ネットワークの広さや多様性とその機能について男女比較を行う。T09は感情管理をキーワードに, 友人関係の「希薄化論」と「選択化論」を検証する一方(2章), ウォーム・ホット・クール(3次元)から高校生のパーソナリティをとらえ, 社会的性格論の観点から論ずる(3章)。

以上に加えUK08の1章は「ゆとり教育」と学習実態の関連をテーマとするが, 紙幅の制限でこれ以上の紹介はできない。ぜひ実際に両書を手に取り, 社会変動との関連から現代高校生の意識を読み解く手引きを得て欲しい。